

## 藤沢山日鑑

しょうじょうこうじ ごんじし

作者:清浄光寺近侍司(役僧の当番制)

成立:享保8年(1723)ー



## 解題

## Keyword

- 時宗
- 清浄光寺
- 遊行寺
- 藤沢宿
- 「遊行日鑑」
- 「在京日鑑」
- 一遍智真
- 遊行上人
- 無量光寺
- 藤沢上人
- 「相続日鑑」
- 「江戸参府日鑑」
- 「近侍司日鑑」

時宗総本山清浄光寺(遊行寺(ゆぎょうじ))の公用日記。江戸中期のものから現存する。寺の記録だけではなく、藤沢宿を通行する人々の関連記事や、宿役人・問屋との関わりも記載されており、藤沢宿の当時の様子を知るための貴重な史料である。



藤沢(遊行寺)『東海道名所画帖』より

## ■ 原本発見と調査過程

望月華山は著書『時衆年表』で、太平洋戦争中、清浄光寺の宝蔵に出入りしている間に、無造作に積み上げられている膨大な日鑑の山を発見した様子を述べている。

当時、望月は時宗宗学林学頭として出仕中で、京都大学赤松教授を中心とする調査に立会っていた。それらは「厚いものは五センチばかり、薄いものは二、三十枚、二百冊はあるであろう、すっかり埃にまみれ、紙魚に綴じられて一枚の板のようになったもの許りである。恐らく何十年も人の手に触れたものとは思われない」といった様子だった。望月はこの日鑑類の出現により、時宗年表の作成を決意したという。

これに先立ち昭和15年(1940)ごろ、弱冠24歳の角川源義(角川書店創設者)が、熱意を認められ「時衆過去帳」、「御歴代系譜」、「日鑑」などの閲覧を許されていたと、友人の杉山博は記している(「角川源義と「遊行日鑑」」)。

昭和44年以降に行われた藤沢市史編纂のための調査の際、「藤沢山日鑑」は「遊行日鑑」「在京日鑑」等と共に公開された。その後昭和48年7月に児玉幸多を団長とする「遊行寺調査団」が結成され、本格的な調査が開始され、更に多くの新史料が発見された。

## ■ 作 者

「時宗要義問弁」によると、日々の記録、日鑑等の記載は、「近侍司」(ごんじし)という役僧が行っていた。「近侍司」は古くは「人召」といい、取次役であり、余寺の帳場でもあるという。四軒(衆領軒を加えて五軒というのが一般的である)または十室と呼ばれる僧階の者が務めたという。「時宗門法服并法臈階級之次第」によると、五軒は修行8年以上の者で、和尚と名乗ることが許され、十室は修行5年以上の者だという。五軒・十室はまた中老と呼ばれていた。十室は含まず五軒の者が務めたという説もあるが、いずれにしろ、平僧ではなくある程度の修行を修めた者の役職であったようである。10日間ごとに交代したようで、当番の名前も『藤沢山日鑑』に記されている。

橘俊道の「『遊行過去帳』と『御先使手扣』」によると、玄関近くに当番所がおかれ、近侍司は御番頭の指揮を受け、来訪者の応接・布施・冥加料・献上物等の収納にあたり、併せて日々の出来事を日鑑に記入して後日の参考にしたという。日鑑に毎日の来訪者・金品の収入が詳細に記されているのは、それが記入者の近侍司の主要な役目であったためだとしている。また近侍司はもう一人、本堂に詰めて法要に関する事柄・一般参詣者の応待・整理に当たる者もいたという。

## ■ 内 容

時宗総本山清浄光寺(遊行寺)の公用日記である。時宗は一遍智真を祖として鎌倉時代末期に成立した念仏宗である。一遍は諸国を巡り、人々に念仏を勧める日々のうちに生涯を終わり、寺に住むことはなかった。諸国を旅して仏法をひろめることを遊行(ゆぎょう)といい、一遍は遊行上人と呼ばれた。2代真教は、一遍と同様、諸国遊行の旅を続けたが、遊行上人の位を譲ってから相模国当麻(現・相模原市)の無量光寺で、わずかな時衆(時宗に帰依した信仰者)と暮らした。これを独住(どくじゅう)という。3代智得上人も同じく無量光寺で独住生活を送ったが、4代目の遊行上人呑海は藤沢の廃寺、極楽寺を再興して、藤沢山清浄光院(後に清浄光寺)とし独住した。これ以後、遊行上人は引退すると清浄光寺に住み藤沢上人(とうたくしょうにん)と呼ばれるようになった。遊行寺とは遊行上人のいられる寺という通称である。こうして遊行・藤沢2人の上人が存在する時期が長く続いた。明治に入るとそれまでのような不断の遊行の旅を継続することが困難になった。明治18年(1885)以降、遊行・藤沢両上人を一人の上人が同時に相続することとなり、現在に至っている。

この独特の形態を反映し、遊行寺には「日鑑」が二種類ある。一つは「遊行日鑑」であり、遊行上人が全国を遊行してまわった様子を克明に記したものである。正徳元年(1711)～大正11年(1922)までのものが現存する。特に京都滞在中のものを「在京日鑑」と呼ぶ。時宗研究の基本史料としてだけでなく、近世の庶民の歴史、交通の歴史を知る史料としても重要である。

「藤沢山日鑑」はこれに対し、藤沢上人を中心とする総本山清浄光寺の記録である。現存する最古のものは享保8年(1723)とされる。(翻刻された『藤沢山日鑑』の第1巻には正徳元年の記事が収録されているが、これは現在、「遊行日鑑」の記事であろうとされている)『藤沢山日鑑』には、遊行上人から藤沢上人に遊行を相続した場合の「相続日鑑」と、将軍代替による「江戸参府日鑑」も含まれている。

またこのほか、「近侍司日鑑(ごんじしにつかん)」「内近司日鑑(ないごんすにつかん)」「香飯寮日鑑(こうはんすにつかん)」、更に本来日鑑の中に記入されるべき「書簡控」がある。先述したように、近侍司は「藤沢山日鑑」の筆者であったと思われるので、「近侍司日鑑」は「藤沢山日鑑」の代替となる場合もある。また「書簡控」も本来日鑑の中に記入されてしかるべきものなので、この両者は翻刻された『藤沢山日鑑』のなかに、一緒に収められている。「内近司日鑑」は、藤沢上人のそばに仕え、身の世話をする役僧の日鑑であり、「香飯寮日鑑」は僧の食事を司り、田畑山林土地の直接の管理にあたる役僧の日鑑である。これらは翻刻されていない。

「藤沢山日鑑」には、寺の年中行事、役僧交替、寺社奉行の達(たつし)、檀家・末寺の入山、住持交替、檀家・僧侶の物故、末寺・大名等との使僧・書簡の往来、公儀・公家・諸大名・文化人等の来訪、幕府役人その他の藤沢宿通行、参勤交代往来の様子、藤沢宿の間屋・宿役人との関わり、藤沢宿および隣接する村々の様子、来訪者の持参した菓子や酒等の名、毎日の天気などが記載されている。ただし、藤沢宿を通行した全ての大名・公家等が記載されているわけではなく、清浄光寺と日頃から関わりのある者に限られている。

当時の藤沢宿の状況を知るための貴重な史料であるが、年により伝来していない「藤沢山日鑑」もあり、執筆者も当番制のため、記載には精粗がある。

関連資料として、藤沢市文書館により、「『藤沢山日鑑』主要項目年表稿」「『藤沢山日鑑』記事年表」が作成されている。

## ■ 諸本

原本は従来清浄光寺(遊行寺)の宝蔵にあったが、現在は遊行寺宝物館が所蔵している。『藤沢市史資料所在目録稿』第12集(後に『全国時宗史料所在目録』に再録)には「藤沢山日鑑」として169冊が掲載されている。

昭和58年(1983)、藤沢市文書館より翻刻本『藤沢山日鑑』の刊行が開始され、現在も刊行中である。



## 構成

※翻刻本の構成

- 第1巻 正徳元年、享保8年～延享2年、解説、清浄光寺年中行事  
 第2巻 延享2年～宝暦6年、解説「時宗教団における四院・二庵・五軒・十室について」  
 第3巻 宝暦6年～12年、解説「踊躍念仏＝庭踊のこと」  
 第4巻 宝暦12年～明和6年、解説「諏訪神社と時宗」  
 第5巻 明和6年～安永5年、解説「時衆と連歌」  
 第6巻 安永6年～天明元年、解説「時宗遊行派末寺一覧（付他派）」  
 第7巻 天明2年～8年、解説「清浄光寺に鎮座する宇賀神について」  
 第8巻 寛政元年～4年、解説「堀田家三代の墓碑について」  
 第9巻 寛政5年～9年、解説「南部茂時の墓」  
 第10巻 寛政10年～12年、解説「清音亭について」  
 第11巻 寛政13年～文化2年（1805）、解説「『一遍上人語録』刊行寄進者釈円意居士墓について」  
 第12巻 文化3年～7年、解説「小栗判官照姫と長生院」  
 第13巻 文化8年～12年、解説「中雀門と放生池について」  
 第14巻 文化13年～文政3年（1820）、解説「薄念仏会について」  
 第15巻 文政4年～7年、解説「清浄光寺と塔頭」  
 第16巻 文政8年～11年、解説「清浄光寺炎上と再建」  
 第17巻 文政12年～天保2年、解説「寛文六年銘の五輪塔と六地藏」  
 第18巻 天保3年～5年、解説「清浄光寺の寺院明細帳」  
 第19巻 天保6年～8年、解説「山門前青銅灯籠のこと」  
 第20巻 天保9年～11年、解説「清浄光寺の復興と「いろは坂」四十八段」  
 第21巻 天保12年～14年、解説「清浄光寺の文化財」  
 第22巻 弘化2年～4年、解説「尊任・尊観と清浄光寺」  
 第23巻 弘化5年、嘉永3～4年、解説「遊行上人相続の日について」  
 第24巻 嘉永5年～7年、解説「清浄光寺蔵の後醍醐天皇像」  
 第25巻 安政2年～5年、解説「清浄光寺における瑜伽大権現について」  
 （2007年9月現在 続刊刊行予定）



## 史料本文を読む

<翻刻本>

- 『藤沢山日鑑』第1～25巻 藤沢市文書館 1983-2007 [K18.52/40]



## 史料についてさらに知る－参考文献－

### < 原本発見・調査過程について >

- ◆望月華山「時衆年表上梓について」(『時衆年表』望月華山編 角川書店 1970 [K18/15])
- ◆阿部征寛「時宗史料調査と史料概要」(『遊行』遊行寺(時宗)開宗700年記念観光展実行委員会 1975 [K18. 52/49])
- ◆杉山博「角川源義と「遊行日鑑」」(『遊行日鑑』第1巻 圭室文雄編 角川書店 1977 [K18. 52/24/1])
- ◆高野修「清浄光寺の文化財」(『藤沢山日鑑』第21巻 藤沢市文書館 2003 [K18. 52/40/21])

### < 作者について >

- ◆浅草日輪寺「時宗門法服并法臈階級之次第」(『続々群書類従』第12輯 国書刊行会 1907 [081/3/12])
- ◆橘俊道「『遊行過去帳』と『御先使手扣』」(『遊行日鑑』第2巻 圭室文雄編 角川書店 1978 [K18. 52/24/2])
- ◆著者不明「時宗要義問弁」(『定本時宗宗典 下』時宗宗務所 1979 [K18. 52/101/2])
- ◆河野憲善「時宗要義問弁解説」(『定本時宗宗典 下』時宗宗務所 1979 [K18. 52/101/2])
- ◆高野修「時宗教団における四院・二庵・五軒・十室について」(『藤沢山日鑑』第2巻 藤沢市文書館 1984 [K18. 52/40/2])
- ◆高野修「時宗教団における僧階の確立」(『時宗教団史』高野修著 岩田書院 2003 [K18. 52/100])

### < 内容について >

- ◆圭室文雄「遊行寺の日鑑について」(『遊行』遊行寺(時宗)開宗700年記念観光展実行委員会 1975 [K18. 52/49])
- ◆圭室文雄「時宗の本末関係と遊行日鑑」(『遊行日鑑』第1巻 圭室文雄編 角川書店 1977 [K18. 52/24/1])
- 『遊行寺』橘俊道著 名著出版 1978 (藤沢文庫1) [K18. 52/26]
- ◆高野修「解説」(『藤沢山日鑑』第1巻 藤沢市文書館 1983 [K18. 52/40/1])
- 『遊行寺の歴史と概観』中居良光著 遊行寺 1984 [K18. 52/55]
- ◆荒井秀規「『藤沢山日鑑』主要項目年表稿1」(『藤沢市文書館紀要』(10) 藤沢市文書館 1987 [K05. 52/6/10])
- ◆酒井麻子「『藤沢山日鑑』記事年表」(『藤沢市文書館紀要』(21)～(29) 藤沢市文書館 1998-2007 [K05. 52/6/21-29]) ※21号のみ渋谷眞美との共著

### < その他 >

- 『藤沢市史史料所在目録稿』第12集 藤沢市文書館 1978 [K27. 52/2/12]
- 『全国時宗史料所在目録』圭室文雄編 大学教育社 1982 [K18/52/33]